神楽舞いで友情出演

科学万博、お祭り広場「美浦の日」に

（横越下神楽保存会）

人気を呼んだ神楽舞い

五月二十七日、科学万博いばらぎパビリオンお祭り広場で開かれた「美浦の日」に、横越下神楽保存会（阿部進代表一行十一人）の神楽舞いと剣舞いが姉妹村の友情出演し、美浦村の人たちや万博見学者を感激させました。

「美浦の日」には、同村の小学生の鼓笛隊、中学生の吹奏楽、文化協会の舞踊をはじめ、民踊、郷土芸能、コーラス、詩吟、子どもみこしまで村あげての多彩な行事が繰り広げられました。

こうした中で、横越下神楽舞いと剣舞いも熱演、観客から大かっさいを受けました。

また、新聞でも四紙で、〝友情出演でお祭り広場に彩りを添えた〟〝人気を呼んだユーモラスな獅子舞い〟と、写真入りで大きく紹介されました。

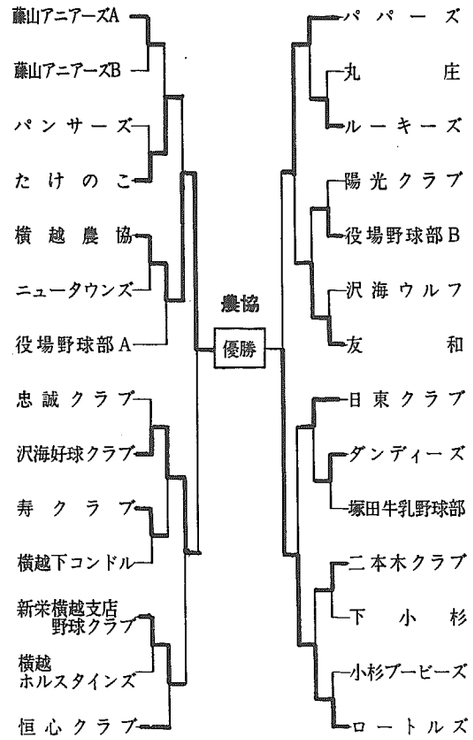
代表の阿部さんは「万博会場で我々の神楽を披露することができて最高。郷土芸能で姉妹村として親善が果せてうれしかった」と話していました。

第11回早起き野球大会

横越農協5回目の優勝

よみがえるロートルズ大健闘

最優秀選手　陸　高志（横越農協）
優秀選手　石塚富雄（ロートルズ）
敢闘選手　佐藤克己（ロートルズ）



7月16日から村民プールの一般開放

▽平日　16時～18時
▽土曜日　13時～17時
▽日曜日　10時～17時

児童・生徒のプール利用は原則的に認めません。ただし保護者同伴の場合は、認めます。

※プールを一般開放しない日
8月13・14・19日

人気上々の「近代短歌講座」

―10月まで毎月第一水曜日―

今年度村公民館で新しく開設した「近代短歌講座」の第一回講座が六月五日行われました。

講師は、新潟南高校塩浦彰教諭で、五〇余人が受講。講師の手作りのテキストをもとにわかりやすく講義がされ、「昨年の平家物語講座にも劣らない人気のある講座になりそうだ」と、公民館職員は期待しています。

第一回講座は、明治短歌革新運動の出発、正岡子規、伊藤左千夫、長塚節らの根岸短歌会の革新運動と題して、歌人の生い立ちや行動、作品の解説などわかりやすく話されていました。

この講座は、十月まで毎月一回第一水曜日に行われる予定で、公民館では、途中からでも聴講できるとして、参加者を呼びかけています。

手作りのテキストでわかりやすく講義

使用済み乾電池回収

将来にわたってきれいな生活環境を守るために

7月17日・11月20日

村と村公衆衛生協議会は、全国的に大きな問題になっている「使用済み乾電池」を今年度から年2回の回収を行うことになりました。

乾電池は、時計、ラジオ、カメラ、おもちゃなど、私たちの身の回り品に数えきれないほど使われています。

しかし、この乾電池には最近問題になっている「水銀」が含まれています。

これらの使用済み乾電池を私たちは何気なく不燃物ごみとして扱ってきました。

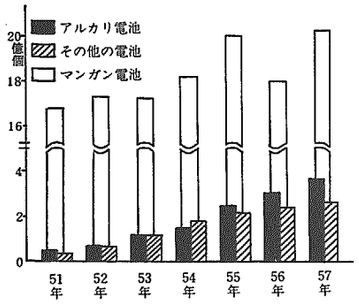
捨てられた乾電池を処分するため、焼却すれば排ガス中に水銀が含まれますし、また、埋め立てれば、いつまでもその場所に水銀が残り、環境汚染や人体への影響が心配されてきます。

村では、生活環境を将来にわたって守っていくために、また、再資源化のために北海道の再処理工場に送ることも含め検討をすすめ、7月17日と11月20日に使用済み乾電池を回収することになりました。

回収日まで回収専用袋に入れて各家庭に保管をお願いします。

なお、回収には、乾電池のほか、螢光灯、水銀体温計、鏡など水銀を含む有害ごみも含めて行います

こんなにも水銀が含む乾電池が生産
（暮しの手帖No.85より）



登記関係手数料の納付は登記印紙で

7月1日から

昭和六十年七月一日から登記所の経理が特別会計によって行われることに伴い、不動産登記簿や商業・法人登記簿等の謄抄本交付、閲覧、証明の申請に要する手数料は、従来の「収入印紙」でなく、「登記印紙」によって納めていただくことになります。

この登記印紙は、七月一日から全国の集配郵便局や登記所の最寄りの郵便局で販売されます。

なお、売買や相続等による所有権移転、抵当権設定、会社の設立、取締役等の変更等の登記の申請の際納付する登録免許税は、これまでどおり収入印紙で納付していただきます。

第37回俳句作品公募

句題　○緑蔭
　　○蟬
　　○土用波

締め切り　7月13日
横越村公民館まで

集う！国際青年年記念集会

日時　7月21日(日)
　　午前10時～午後5時
会場　弥彦総合文化会館
プログラム
一、講演
「国際青年年を迎えて、今世界は青年に何を望んでいるか」
広瀬久美子氏
NHKアナウンサー
二、県オリンピックメダリストの会との集い
笠原茂夫氏ほか5人
三、青年の芸能発表
フォークコンサートほか
主催　国際青年年新潟県推進会議

小説「文芸」

〈短歌〉⑥

北方歌人主宰　塩井三作

「生きているうちに香典くれッ」

お金のもらい方が上手だった存さん

道に労れけり　今日もちまたに　銭乞ひあり く〟

存さんは、「県内地名考」や「越佐方言七十五年」という本とか、新潟県民俗学会を創立する資金とかで、たびたびお金をもらい歩いたので、お金のもらい方が上手だったそうです。

石山の山田さんという老人が私にこんなことを話したことがあります。

「存さんは、おれが死んでも香典はいらないから、今日香典をくれや、と言うんですね。存さん、この前来た時私は、香典をあげたんだがね。というと、そうだったか、でも、あの時に死ねば良かったろも、まだ生きていたがな。もういっぺんくれや。と言われまいりましたね。とにかく存さんは、何回も香典をもらうんだから。」と笑いながら話しをしていましたが、存さんらしいやり口だと思いました。

そのようにしてお金をもらって歩いた存さんですが、内心はけっして楽でなかったようです。この歌がその頃の心の中を正直に言っている歌だと思います。

〝汽車の中の　掏摸男をばたたへなむ　われを富めると見しは君のみ〟

「生きているうちに香典をくれ、くれ」といって集めたなけなしのお金をすられた存さんは、「あいつは偉いスリだ。おれを金持ちだと思ってねらったんだから」と、喜んでいる歌です。存さんらしい割り切り方をしているのがおもしろい。

存さんのお金の歌についてご紹介しましょう。

〝君と逢ひて　ふところ銭の悲しかり　古町十字路騒音の中〟

いつもお酒をごちそうになっている非常に親しい人と会ったのでしょう。今日はおれが一杯おごってやらねばと思ったのですが、「いや、待てよ。お金をさっぱり持っていないんだ。さて困ったわい」と、古町十字路の騒音の中で迷ってしまったという歌です。

〝たまたまに　原稿売りて得たる銭　饅食へばなくなりにけり〟

存さんは、原稿を売ってそのお金で生活していたのですが、小説家などと違って、そんなに大金が入るわけなどなかったのです。

ところが存さんは、原稿料の入ることを喜んでいて、親しい人に会うと、「近いうちにどこどこから原稿料が入るから一杯やろや」と、原稿料を手にしないうちに飲んでしまうことがたびたびあったそうです。「ああ、あれほど苦心して書いた原稿を売ったお金だったのになあ」と、うなぎを食べた後に、しょんぼりしている存さんの姿が見えるような歌です。

〝万歳の　来ては去りゆく　この朝げ　僅かな銭の　足らふが嬉し〟

神楽獅子を持った万歳が来ると、「やあ、おめでとう、おめでとう」といいながら一〇円や二〇円を喜捨してやると、相手も「大福万歳！」などと応えてニコニコして帰っていくのです。

存さんは、毎年の正月がこうだったわけではなかったのでしょう。それでこの朝、わずかな銭が足りたのが嬉しいといっているのです。

存さんは、常に人からお金をもらって生活しているのですから、「人にお金をやるというのはいい気分のもんだ」と、しみじみ思ったのだと思います。

〝この心　はてなき